

總持寺の鶴見御移転に至るまで

Relocation Process of Sojiji Temple from Noto to Tsurumi

関根 透

Toru SEKINE

「鶴見大学紀要」第49号 第4部

人文・社会・自然科学編（平成24年3月）別刷

總持寺の鶴見御移転に至るまで

Relocation Process of Sojiji Temple from Noto to Tsurumi

関 根 透

Toru SEKINE

はじめに

鶴見の總持寺は、今からちょうど百年前の明治44年11月5日に石川県輪島市門前町から盛大な遷祖式を挙げて移転してきた。そのご移転に至るまでの当時の流れについて新聞資料を中心に説明したいと思う。なお、盛大な遷祖式については『鶴見大学仏教文化研究所紀要』第17号と『第20回記念總和会全国大会記念誌』に詳述したので、それをご参照していただきたい。

ご移転の理由

曹洞宗大本山總持寺は、百年前は檀信徒のみならず多くの日本人の心の支えとなっていた。その大本山總持寺が、明治31年4月13日夜半、法堂から出火し、折からのフェーン現象も重なり、一夜にして灰燼に帰したのである。その焼失の状況を明治31年4月15日の『横浜貿易新報』は次のように伝えている。その記事は、まず總持寺の歴史、名利、大伽藍などを記した後で「一昨十日の夜如何にして火を失しけんさしにも広大なる殿堂ハ数時間にして悉皆烏有に帰したる由是れ大伽藍一夕の中に灰燼となしたること曹洞本末の悲嘆ハ云ふ迄もなく国家に於ける名利保存の趣旨に照らしても実に惜しむべきの限りと云ふべし」と伝えている。伽藍の中心である仏殿、法堂、紫雲台、放光堂、大庫裡、勅門、祥雲閣、役寮室、衆寮、鐘楼などの中心堂宇が焼失して、翌日の午前2時頃に鎮火した。延焼を免れたのは僅かに伝燈院、慈雲閣、経蔵、三松閣などである。また、同日の『読売新聞』は「後醍醐天皇の綸旨ありし名利にして、仏殿法堂勅門庫裏僧堂相連なりて、一山数十棟の殿堂を一昨十三日の夜、如何にして火を失しけん、此の広大なる殿堂を数時間の間に悉皆烏有に帰したる由の報あり。電文にして詳細を知るに由なけれ」と伝えている。こうして多くの新聞が總持寺の火災をビッグニュースとして報道したのである。明治31年5月15日に東京出張所から発行された鳥瞰図『曹洞宗大本山諸嶽山總持寺焼失並残存区分真図』には、中央の赤い部分が焼失した伽藍として表し、如何に重要な

部分が焼失したか、が一目瞭然に理解できる。なお、『宗報34号付録』（明治31年5月15日）（總持寺誌・p112）に上述の鳥瞰図を付けて、東京出張所監院・石川素童師は宗務局並びに全国末派寺院へ罹災状況を詳しく報告している。

さて、再建を実質的に進めなければならない立場にあった監院職の石川素童師は、早速に東京出張所から明治31年4月28日に、全国の関係寺院に罹災状況を説明し、再建本部を設置したことを『宗報33号』で伝えている。早速に明治31年10月（21日）28日に總持寺直末寺院会議が開催され、總持寺の再建が検討された。翌年11月5日には宗務局より「一宗協力して大工事の達成を期す」との告諭が永平寺と總持寺の両貫首の連名によって能登に諸殿堂を再建することを発令され、費用の募集組織などを策定した。この時点では『北国新聞』によれば、能登の地における總持寺の復興再建計画であった。しかし、その1週間後に東京深川の長慶寺住職・武藤弥天師などから「總持寺東京移転建白書」が提出された。多分、この焼失を「祝融の災」と捉えて遷山を唱えたと『鶴見興隆誌』（p50）は述べている。

現況を見れば、能登の總持寺は明治政府の宗教政策により曹洞宗大本山としての維持を続けるためには経済的な困難が推測された。それは、新政府の「神仏分離令」と「社寺領土地令」により前田家からの資金援助もなくなり、経済的な基盤を失っていたのである。一方、内部からの制度改革により、永平寺と總持寺が同格の本山となり、教団の近代化も進行していた。こうした厳しい状況を鑑みると、帝都から離れた能本山での再建がよいか、疑問視される。それでも、明治32年11月5日に「大本山總持寺諸殿堂再建に付末派寺院再建に及び檀家信徒は熱誠を傾けて勸奨翼賛以てこの前古稀有の大工事を迅速円満に落成せしめんことを望む」と両本山貫首の署名を付けて発せられた。能本山再建組織が明治33年3月15日に結成された。

さて、この再建に当っては多くの困難が予想された。明治には都が東京に遷都され、明治天皇が東京の皇居にお住まいが移った。天皇に近侍すべき曹洞宗大本山

總持寺も東京に移転すべきとの意見もあったという。先述の如く、この焼失を好機と捉えて本山の總持寺を東京へ移すべきとの建白書が東京府下の曹洞宗寺院から提出されたのである。その理由は、「第一、一宗の本山を北陸辺陲の地に置くは時勢に適せざる事。第二、一宗の本山を北陸辺陲の地に置くは不便なる事。第三、本山を都会付近に移転せしむるは経済上有利なる事。第四、本山を都会附近の地に移転せしむるは布教伝道に益あり。第五、御本山の移転地は東京附近なるを要す。」と納富常天著の『總持寺と曹洞宗の発展』p246で示している。その上に、『明教新誌』によると、「明治三十三年五月長野県北部の曹洞宗寺院住職及び檀徒等当本山再建に当り「本山を東京に移さん」の事を当本山貫首に請願した」と『總持寺誌』p116でも記載している。こうして本山再建復興計画は、裏では移転問題と連動して進むことになった。更に、山梨県、静岡県、愛知県、長野県などの曹洞宗寺院から、また、時を同じくして大分県や宮崎県の寺院などからも東京近郊へ移転すべきとの請願書が提出されたと『読売新聞』は報じている。その理由は概ね東京長慶寺の武藤弥天住職らが提出した内容と同じであった。再建計画はすでに能本山における總持寺として着々と進んでいた。

しかし、裏では本山の總持寺を東京近郊に移すべきとの案が模索されていた。むしろこの大火を好機と捉えて曹洞宗を発展させるためにも、本山を帝都へ移転すべきであると考え方が変わってきた。従って、本山移転の最大の原因はこの大火にあったと思われる。

明治37年2月8日に日露戦争が勃発して、總持寺の再建計画は表面上、頓挫してしまっただけに見えたが、実は、国難の中でも内々に再建復興計画は進んでいた。その上、内密裏に能登の僻地に新たに再建するよりは、大火を好機と捉えて東京近郊に移転することを調査し始めていたのである。翌年の明治38年9月5日にポーツマスで日露講和条約が締結され、国難は終わった。この年には總持寺内でも大きな変化があった。明治38年2月25日に西有穆山禪師が本山を退董され、代って石川素童師が禪師に就任し、貫主が交代した。これから石川禪師の指導力を持って本山再建事業が積極的に進行することになった。東京近郊へ移転すべきの流れが強くなった。徐々に大本山總持寺の移転復興計画が具体的になってきた。ご移転は道元禪師の「それまた世に随い時に随ふべし。仏法いづれの地においても所行の勝地と為すなり」と遺言書にも見られること、後醍醐天皇の綸旨の主旨からも帝都近くに移ってもよい理由があった。

東京近郊の移転先候補地として横浜鶴見の他に、八王子の永林寺や高尾の高乗寺、松戸の広徳寺などが本山移転候補地として取りざたされたことが当時の新聞

記事から推測できる。明治39年7月26日の『読売新聞』では「此の御移転問題は数年前に起り居たるものなるを雨宮敬次郎氏の熱心なる奔走に加ふるに現管長石川素童師の大なる賛成によりて時期を早めたるものにて最初この移転説の伝えはるや千葉県如きは同本山を地方に移さば其の繁栄を來たすが故に幾萬町歩の地所と雖も望みによりて寄附す可しとの申込みをなせし」と報道している如くである。候補に挙げられた千葉県松戸市中金杉4丁目の「広徳寺」は、裏は平安時代からの広大な牧場が広がっていた。他に、候補地として東京八王子市下柚木4の「永林寺」である。この寺院も広大で、裏山は柚木城跡に繋がり、現在でも長い参道を抜けると、左手の山腹には立派な三重塔の建つ寺院である。また、高尾の高乗寺も大きな寺院で、大きな霊園を営み、高尾駅から直通のバスが運行されている。なお、『跳龍』平成23年3号(p37)にも、松戸と八王子説が載っている。結局、曹洞宗大本山總持寺は横浜鶴見に建設されたのである。

鶴見に決定した経緯

今から百年前の鶴見は本山が創建される地に最もふさわしい条件の整った土地であった。まず、鶴見は、神奈川県橘樹郡生見尾村(生麦・鶴見・寺尾)といい、眺望の素晴らしい閑静な農漁村であった。その上、帝都と開港された横浜の中間にあり、交通の便に恵まれた土地であった。明治39年3月20日の『横浜貿易新報』には「同地は恰も京浜間の中央とも云ふべく、鶴見停車場を距る僅か二町余、加之のみならず、京浜電鉄の便もありて、敷地となすべき処は・・」と正面は海、遠く房総半島、西南は富士山と箱根山、北は品川、東南は横浜市中や本牧とその眺望の良さを示し、「地味豊穰にして禾黍穰々、樹木は繁茂し、清水は湧き、遠く俗塵を隔だて、解脱悟道の霊場となすに適當なる地勢なれば、雪巖氏は直ちに其旨を貫首に報告し・・」と記されている。また、『皇室と總持寺』(p21)でも、「鶴見停車場から西の方へ三町程、松林がこんもりと繁っている処で、北には二見台、南は富士見台の景勝を控えて其の中央の竈のやうに深く入り込んだ処には清冽な四時潤れずに湛えて居ります」と説き、近接する現在の京浜工業地帯を考えると隔世の感がある。当時は總持寺を建立するのに相応しい景勝の良さと信徒の訪問にも最良な土地であった。更に、鶴見移転説が有力になった最大の理由は、副監院の栗山泰音師と鶴見・成願寺の加藤海応師との親密な関係が具体的に進展したことである。

これより先、明治34年3月15日に西有穆山師が禪師に就任し、同年4月24日には『大雄山誌』によると、石川素童師は東京出張所の監院職とともに豪徳寺から大雄

山最乗寺に基盤を移している。当時の大雄山最乗寺は、東国における總持寺派の拠点であった。その大雄山最乗寺の住職になったのである。明治34年4月の栗山泰音副監院の手記には、「明治35年5月28日鶴見の地理を探検する。6月5日に人夫を雇い、秘密に巡見す。6月14日に鶴見の件初めて石川に内談す」とあって、石川監院に報告し、18日には石川素童監院は栗山泰音副監院と成願寺住職・加藤海応師の案内で鶴見が丘を探検している。このことが、『総持寺誌』（p121）に栗山師の『手記』として記されている。更に、日時は不明であるが、西有穆山禪師が人力車に乗って、鶴見が丘の總持寺の建設予定地を数人の僧侶たちと見聞している写真がある。つまり、秘密裏に着々と總持寺の移転計画が進み、具体的な土地の献納にまで及んでいたのである。栗山師の手記によると、明治36年6月18日には總持寺の移転先を鶴見に決定した、記載されている。つまり、能登に本山總持寺を再建するのではなく、本山を鶴見に移転して大本山總持寺をそこに再建復興するということである。7月3日には、石川素童監院は加藤海応師に面会して移転の話を詰めている。こんな時に、国難である日露戦争が明治37年2月8日に勃発し、表面上は本山再建の計画は頓挫したかに見えた。実は、この間に栗山副監院は加藤海応師と旧知の關係から總持寺に成願寺の土地を極秘に献納することを約束していた。また、鶴見の近隣寺院である建功寺や住民も本山移転に大変協力的であった。

明治38年2月25日に西有穆山貫首が退隠して、4月16日に最乗寺住職・石川素童師が貫首に当選された。石川素童禪師が独住四世として新貫首に就任された。

早速に、明治39年4月23日の石川素童禪師が能本山總持寺に帰山することになった。東京芝公園の別院を早朝に石川県門前町へ向かって出発された。能登の住民や信越線沿線の住民は大歓迎し、熱烈であった。その歓迎の様子を大野園山老師が『独住四世石川素童禪師入山記』として格調高い漢文で道中記を残している。その概略は『跳龍』2000年3号（p.9）から示すと「織田、沖津両監院が上野駅まで見送り、今井鉄城老師、小衲師らが随行し、横川、軽井沢を過ぎ、直江津では檀信徒の大歓迎を受け、小舟にて本船に移り、伏木港へ、更に七尾港に入る。ここでも檀信徒多数が整列して迎え、そこで小船に乗り換え穴水港へ上陸する。猯下は幾百の檀信徒に答礼しつつ通り抜け、法駕が三松関に入り、猯下が下乗されて太祖堂に入ると、太祖、二祖禪師、五院祖に厳かに焼香されて満堂の善男善女に挨拶された」とある。能登の住民は大本山總持寺の再建に大変な期待を抱いていたことがわかる。しかし、明治39年7月10日には永平寺貫主・森田悟由師から移転同意の承諾を得ている。そのため、明治39年7月23日、突

然地元の輪島市門前町に衝撃が走った。それは『北国新聞』が曹洞宗大本山總持寺を横濱鶴見に移転すると報じたからである。ここから地元では激しい移転反対運動が繰り広げられることになる。この移転反対運動についても別に詳しく説明したい。当然、鶴見住民は大本山總持寺の移転には大変協力的であった。明治39年3月1日に鶴見建功寺住職・枅野宏道師が「移転用地調査委員」に、佐久間権蔵氏が「用地買収交渉委員」に指名された。

明治39年7月26日、東京芝の青松寺で鶴見移転のための曹洞宗の「總持寺移転に関する諮詢会」が開催され、その内容を『北国新聞』が地元の能登で大々的に報じた。諮詢会では永光寺、大乘寺、浄住寺への移転案も出されたが、帝都近郊に移転することに決定した。『読売新聞』は7月31日に「曹洞宗大本山總持寺東京移転」と題して、「種々故障の為未だ再建の運びに至らざるが今回全国六十名の宗會議員を東京に集め貫首臨場の上廿六日より廿九日まで芝愛宕町青松寺に於いて移転再建の件を協議し全会一致を以て移転することに可決した」と報道し、同時に鶴見移転が決定したと報じている。この時に『読売新聞』は、松戸や八王子の案も出たとしている。また、『跳龍』平成23年3月号（p37）の記事にも記されている。既に、永平寺貫首・森田悟由師からも明治39年7月に移転同意も得ている。明治40年3月9日に石川県知事は「神奈川縣橘樹郡生見尾村字鶴見」へ寺基移転の許可も与えている。こうして最も条件の良い帝都近郊の鶴見を好適地として選び、曹洞宗大本山總持寺の移転を決定したのである。

移転反対運動

大本山總持寺が鶴見への移転を円滑に進めたわけではない。先述したように、明治39年7月23日の『北国新聞』は「總持寺を鶴見に移転する」という報道を地元住民は寝耳に水の出来事として、驚愕と怒りをもって受け止めた。それは地元住民にとっては生活の死活問題に関わることなので悲嘆した。以後、能本山移転反対の闘いが明治40年1月20日までの5カ月間続くのである。その様子は輪島市門前町の「禪の里交流館」にある『能本山非移転事件顛末』に詳しく語られている。

早速、明治39年7月25日に小向茂平宅に有志が集まって、今後のことを討議し、27日には、酒井幹櫛比村長、沢正賢、坊藤助らの発起人が中心になって櫛比社で信徒大会を開いた。8月2日に「能本山非移転同盟倶楽部」を結成して、徹底した反対運動を繰り広げることにした。8月6日の石川素童禪師らの帰山に対して、地元群衆が禪師に罵声を浴びせ、石川禪師らは穴水に宿泊すると見せかけて、夜半、3台の人力車で能本山に向かった。しかし、途中で最初の随行者である七尾東嶺寺の

總持寺の鶴見御移転に至るまで

岡田泰明師の人力車が転倒させられる事件が起った。この事件について『読売新聞』を初め、多くの新聞が詳しく伝えている。帰山した石川素童禪師に対して13日と14日には酒井氏、坊氏らが面会し、16日には金沢で村上石川県知事に面会している。(『跳龍』平成23年3月号、p36)。8月21日に穴水の瑞源寺で能登國信徒大会を開き、「能本山非移転倶楽部」は全国に移転反対の檄を飛ばした。本山は地元の加熱に対して冷静に対処するように、年来の歴史的経緯と時代の変化を述べて鎮静化を図った。更に、輪島蓮江寺でも非移転大会を、七尾でも非移転大会が開かれた。10月には大隈重信、永平寺の貫主森田悟由師、前田侯爵、織田雪厳師などに非移転に理解を示すように嘆願書を送った。11月13日には、金沢公会堂で石川県信徒大会を開き、300人以上が集まり、移転反対を決議して内務大臣と石川県知事に陳情することにした。しかし、全国の移転賛成派は12月5日に「曹洞宗大本山總持寺移転願」を石川県庁に提出している。

總持寺は移転反対派の信徒総代の3名を解任して、新たに森岡真氏、林謙吉郎氏、平岡万次郎氏の3名の移転賛成派を総代に任命した。こうした地元の動きを心配した村上石川県知事は明治40年1月20日に調停に入り、全国の檀信徒の様子を伝えた。總持寺はその後、解任した3名を復帰させている。こうして總持寺の鶴見移転が地元の合意を得て正式に決定した。地元には、14カ条からなる「希望啓沃書」を石川素童禪師に提出して、知事の調停を受け入れた。啓沃書の内容は詳しく後述するとして、能本山も再建すること、禪師の退任後の生活基盤は能本山とすること、「別院」として能本山を保護するなどが示されている。「祖院」と称するのは、昭和40年代からである。

大本山にとっても、長い歴史のある能本山を焼失したままにして置くわけにいかない。地元との約束もある。能本山と鶴見の新本山の両方を進めなければならない石川禪師にとっては大変な心労を背負うことになった。

能本山の取扱いについて

能本山を中心とする門前町地元住民にとっては總持寺の再建は死活問題である。そこで、地元の信徒代表者は明治40年1月29日、曹洞宗大本山貫首石川素童禪師宛に復興請願書である「啓沃書」を提出した。それは14カ条あり、概要を抜粋すると次の如くである。「一、称号ハ大本山總持寺別院トセラルル事。二、別院建築費予算額七万六千七百円ニ・・充テラルル事。三、別院ハ・・・本山現貫首代々兼任職トナサレ度事。四、本山貫首退隱ノ場合ニハ別院ヲ隱棲地トナサレ度事。五、例歳ノ御諱ニハ紫雲台親シク来詣シ法会ヲ修セラレ度

事。六、宝物什器ノ内別院附属ヲ要スルモノハ別院ニ常住セシメラルル事。七、別院ハ・・・本年九月ヨリ起工向五カ年間ヲ期シ落成セラルル事。・・・十四、本山ヨリ山内寺院ヘノ給米ハ従前ノ通り異同ナキ事。・・・」とあって、日付、6名の信徒代表者の名前と印が付せられて、曹洞宗大本山總持寺貫首 石川素童殿となっている。他に、別院に常時僧侶を50人以上安居させることなどが誓約されている。その約束に沿って、明治40年9月13日に能本山總持寺別院における大祖堂の起工式を挙げたのである。

移転後の鶴見の様子

さて、曹洞宗大本山總持寺は、かつての成願寺を中心とした鶴見が丘に建立されることになった。実は、成願寺は鶴見が丘から離れた東寺尾の友野家の辺りにあった。しかし、この辺りは建功寺、宝蔵院、松隠寺があり、毎日の鐘の音が煩いとのことから、成願寺は建功寺の末寺のために建功寺の指示により鶴見が丘の古砦壇に移転させられた。つまり、成願寺は現在の總持寺三松閣と鶴見大学体育館の間にあった。そこに、昭和55年に建てた「成願寺跡」の石碑があるが、大きな公孫樹と本堂があったといわれている。その後、成願寺は總持寺に土地を献納したために現在の豊岡通りと總持寺の間に建っている。かつて、成願寺跡には、伝慈覚大師による薬師堂があって、『新編武蔵風土記』には薬師堂が描かれている。現在新築された成願寺の薬師堂には七将の像が保存されている。現在でも、總持寺から成願寺は色衣着用、内部寺院と云う特別待遇を受けている。また、總持寺の禪師様や役寮の交代は成願寺から出発することにもなっている。土地の献納等の書類は保存されているものの、加藤海応氏に関する資料はほとんどなく、位牌がある程度である。

正式に大本山總持寺の移転が鶴見が丘に決定すると、明治39年12月4日付けで成願寺から土地の寄贈承諾書を得ている。現在でも、成願寺に「土地譲与御願添書御下附願」が残っている。12月5日には、石川素童禪師は石川県庁と神奈川県庁に「總持寺移転願」を提出し、明治40年3月9日には「寺基移転許可」を得て、翌日の3月10日には、早速鶴見移転に貢献した成願寺に対して石川禪師は「加藤海応住職に永代總持寺の知客」の役職と「永代色衣着用許可」などの特別待遇を与えている。明治40年8月2日には「總持寺」の寺号を鶴見に移転し、10月17日に鶴見で總持寺の地鎮式を行った。10月18日に横浜公園内社交倶楽部にて曹洞宗大本山總持寺の入籍披露会を開き、周布神奈川県知事、三橋横浜市長らを招待して、石川禪師は曹洞宗大本山を鶴見に移転したことを説明した、と20日の『読売新聞』は伝えている。11月7日、名古屋萬松寺で鶴見の仏殿の起工

式が行なわれている。

鶴見では、その後總持寺の伽藍再建が慌しく進むことになった。大本山の本堂に匹敵するような建物を直ぐに建設することができないので、本山の本堂に相応しい建物を探すことにした。そこで、石川禪師等は当時、政府の宗教政策の変更から東北地方では疲弊している寺院が多くあったので、経済的な地盤を失っていた山形県鶴岡の総穂寺と青森県西津軽郡鮎ヶ沢の高沢寺（コウソジ）の本堂に注目した。高沢寺は文化8年に再建された建物であるが、柱の太さから安政年間に建設された鶴岡総穂寺の本堂が大本山の本堂に相応しいと白羽の矢を当てたといわれている。この総穂寺は鶴岡城主・酒井家の菩提寺で明治の宗教政策によって疲弊し始めており、檀家総代の間宮家の了承を得て本山に寄贈することを決めたのである。

総穂寺の本堂は安政年間に建造された建物で、荘厳さ、柱の太さなど本山の本堂に申し分のない建物であった。書院も含めて鶴見に移転することになり、東京木場の棟梁・中村善次郎氏を解体指揮官として鶴岡に送り、まず解体した本堂と書院を大切に酒田港へ運び、そこから波穏やかな日を選んで、津軽海峡を経て2隻の大船で横浜港に運ばせた。そこから鶴見川を経て鶴見が丘に運ばれたと思われる。その本堂は「放光堂」に、書院は「跳龍室」と呼ばれるようになった。従って、明治44年11月5日の總持寺移転遷祖式は鶴見が丘には、この2棟の建物があっただけで、至る所が土地の整備や建設工事中であった。

その後、伽藍の建設が進み、明治41年7月には、飛騨白川村の共有林伐採の許可を得て、11月になると、鶴見が丘では伽藍の工事全体が開始された。明治42年2月には飛騨ヤクト谷の国有林の払下げを受けて、木材の伐採が始まる。7月には、材木運搬用のトロッコ道が現在の豊岡通りに敷設され、7月20日に放光堂の立柱式が8時半から貫首石川素童禪師等が参列して挙行されたと『読売新聞』は21日に伝えている。更に、翌年には仏殿等の材木が富山伏木湾より4月には日勝丸で、5月には浦潮丸で伏木湾より横浜港に運ばれている。そして、遂に鶴見總持寺境内に記念すべき最初の堂宇・放光堂と跳龍室が建立し、竣工式を迎えたのである。

おわりに

曹洞宗大本山總持寺は明治44年11月5日に鶴見で盛大な遷祖式を迎え、その後、石川素童禪師の指導力と行動力によって現在のような總持寺の伽藍ができた。私は昭和40年代以降の姿しか知らないが、最も總持寺が賑わったのは石原裕次郎氏の13回忌であったと思われる。百年前の總持寺の移転遷祖式も裕次郎氏以上の賑わいであった。是非、あの賑わいを再び總持寺が取り

戻して錯綜した現代日本人の心の支えになって欲しいと願っている。

